

## 第 12 回例会報告要旨

Y Brasluniau o'r Papurau, y Deuddegfed Cyfarfod,

Rhagfyr yr unfed ar ddeg, 2010

Namba Learning Center, Osaka, Siapan

第 1 部 : 個別報告 Rhan 1: Papur

### 現代カムリ語の学習書

小池剛史

#### Examining textbooks for learning Modern Welsh

Takeshi Koike

This paper will focus on one particular structure, inverted word order of a periphrastic sentence construction with the verb *bod* after reviewing some of the rules of inverting word order, this paper examines how the inverted word order is introduced in different types of Welsh textbooks.

There are several complicated rules for inversion depending on which element of a sentence is emphasised and also on the types of the predicate (either a noun phrase, an adjective phrase, *yn* + verb-noun, or an adverbial expression). Despite this complexity, inverted word order is frequently used in everyday conversations (self-introduction, asking the name, occupation, etc.). It is argued that ideally such expressions with inverted word order should be introduced at the early stage of a textbook, and that at the same time, they should be accompanied with reasonably detailed descriptions of the inversion rules.

#### 1. カムリ語の学習書 : 初めに

外国語学習書の課の進み方には、文構造を基準としたものと言語使用場面を基準としたものがある。カムリ語の場合、文構造を基準とした学習書とは、最初に BOD 構文の基本 (Rydw i'n dysgu Cymraeg のような文) を学習してから次に屈折構文 (Dysgais i Gymraeg のような文) に進むのが通例である。言語使用場面を基準としたものでは、挨拶、自己紹介、相手の名前の訊き方、天候の表し方、出身地の言い方、という風に、使用する場面で必要とされる表現を紹介していく。

## 2. カムリ語 BOD 構文の基本文構造

カムリ語の基本文構造は、1. 動詞前虚辞 2. 動詞 3. 主語 4. 述部という 4 つの要素から成っている（水谷 1996:7）が、カムリ語会話の入門者が最初に学ぶ基本文構造である BOD 構文は次のような文構造を持つ：

BOD 構文の基本構造

文の要素	動詞前虚辞 (文の種類 の標示；肯定、 否定、疑問等)	BOD の 活用形	主語	述部
例文(1)	<b>Yr</b>	<b>ydych</b>	<b>chi</b>	<b>yn dysgu Cymraeg</b> (yn+動詞的名詞)
例文(2)	<b>Y</b>	<b>mae</b>	<b>ef</b>	<b>yn fyfyriwr</b> (yn+不定名詞)
例文(3)	<b>Y</b>	<b>mae</b>	<b>hi</b>	<b>yn bert iawn</b> (yn+形容詞)
例文(4)	<b>Yr</b>	<b>mae</b>	<b>Llew</b>	<b>yn yr ysgol</b> (副詞表現：yn+前置詞句)

(各例文の訳 (1)「あなたはカムリ語を学びます」(2)「彼は学生です」(3)「彼女はとても可愛いです」(4)「セウはその学校にいます」；(1)~(4)は文語体に準拠した形であり、口語体に準拠した形ではそれぞれの文は (1) Rydcych chi'n dysgu Cymraeg. (2) Mae e'n fyfyriwr. (3) Mae hi'n bert iawn. (4) Mae Llew yn yr ysgol.となる)。

各例文は述部内の構造が異なっている。(1)は付加辞 yn+動詞的名詞の構造を取り、付加辞が継続、完了などの相を表わしている。(2) (3)は「述部の yn」と呼ばれる yn の後に不特定名詞や形容詞が置かれるものである。(4)は主語の直後に前置詞句や副詞などの副詞的表現が置かれるものである。

## 3. BOD 構文の倒置形

上述した BOD 構文の文構造を基本とし、文の要素の中のある部分を文頭に置き強調を与える倒置構文という文構造がある。倒置構文は、どの要素を強調するか、また述部内の構造によって倒置の仕方が異なる。Caradar (1935: § 154-164) に倒置の規則が詳細に記されているのでそれを以下に要約する。

**【1】 主語を強調する場合**

[1] (述部内=yn + 動詞的名詞の場合) ⇒ **主語 + sydd yn + 動詞的名詞**

(1a) *Yr ydych chi yn dysgu Cymraeg.*

⇒(1b) *Chi sydd yn dysgu Cymraeg.*

「あなたがカムリ語を学ぶのです」

[2] (述部内=yn + 不定名詞の場合) ⇒ **主語 + sydd yn + 不定名詞**

(2a) *Y mae ef yn fyfyrwr.*

⇒ (2b) *Ef sydd yn fyfyrwr.*

「彼が学生なのです」

[3] (述部内=yn + 形容詞の場合) ⇒ **主語 + sydd yn + 形容詞**

(3a) *Y mae hi yn bert iawn.*

(3b) *Hi sydd yn bert iawn.*

「彼女がとても可愛いのです」

[4] (述部内=副詞表現の場合) ⇒ **主語 + sydd + 副詞表現**

(4a) *Y mae Llew yn yr ysgol.*

(4b) *Llew sydd yn yr ysgol.*

「セウが学校にいるのです」

[5] (述部内=特定名詞の場合) ⇒ **主語 + yw + 特定名詞**

(5b) *Llew yw'r myfyriwr goreu.*

「セウが一番良い学生なのです」

[1] ~ [4]の場合、それぞれ基本となる基本語順の文が変形したものとみることが出来るが、[5]のように述部内が特定名詞の場合は必ず倒置構造で表す。

**【2】 述部を強調する場合**

[6] (述部内=yn + 動詞的名詞の場合)

⇒ **動詞的名詞 + y + BOD の活用形 (肯定形) \* + 主語**

(1a) *Yr ydych chi yn dysgu Cymraeg* ⇒ (1c) *Dysgu Cymraeg yr ydych chi.*

「カムリ語を学ぶのです、あなたは」

[7] (述部内=yn + 特定・不特定名詞の場合)

⇒ **不定名詞 + BOD の活用形 (疑問形) \* + 主語**

(2a) *Y mae ef yn fyfyrwr.*

⇒ (2c) *Myfyriwr yw ef.*

「学生なのです、彼は」

(6) *Y myfyriwr yw ef.*

「その学生なのです、彼は」

[8] (述部内=yn + 形容詞の場合)

⇒ **形容詞 + BOD の活用形 (疑問形) \* + 主語**

(3a) *Y mae hi yn bert iawn.* ⇒ *Pert iawn yw hi.*

「とても可愛いのです、彼女は」

[9] (述部内=副詞表現の場合)

⇒ 副詞表現 + y + BOD の活用形 (肯定形) \* + 主語

(4a) Y mae Llew yn yr ysgol. ⇒ *Yn yr ysgol y mae Llew.*

「学校にいます、セウは」

BOD の活用形部分は、[6][9]の場合は肯定形の形 (動詞前虚辞の y, yr (肯定を表わす) を伴い) を取り、[7][8]の場合は疑問形の形 (動詞前虚辞はなし) を取る。

### BOD の変化形

		肯定形	疑問形
単数	1 人称	yr ydwyf (rydw)*	ydwyf (ydw)
	2 人称	yr wyt (rwy)	wyt (wyt)
	3 人称	y mae (mae)	yw, ydyw (yw, ydy)
複数	1 人称	yr ydyn (rydyn)	ydim (ydyn)
	2 人称	yr ydych (rydych)	ydych (ydych)
	3 人称	y meant (maen)	ydynt (ydyn)

\*カッコ内は口語体の形

### 4. 日常表現における倒置構文

[1] ~ [10]までが BOD 構文の倒置構文のパターンである。これらのパターンは日常的に用いる表現の中によく見られるものである。

#### 初めて会った人に対して用いる表現

(7) *Beth yw eich enw chi?* 「あなたのお名前は何ですか？」

(8) *Llew yw fy enw i.* 「私の名前はセウです」

(9) *Llew ydw i.* 「私はセウです」

(10) *Beth ydych chi?* 「あなたは何ですか？」 (=お仕事は何ですか?)

(11) *Athro Saesneg ydw i.* 「英語の先生です (、私は)」

(7)~(11)は述部が特定名詞の場合、述部倒置の規則が適用される ([7]参照)

#### 所在を尋ねる表現

(12) *Ble mae'r siop?* 「そのお店はどこですか」

(13) *Ar y stryd 'ma y mae hi.* 「それはこの通り沿いです」

(12)~(13)は場所を表わす表現 (副詞的表現) が強調される ([9]参照)

### 電話での受け答え

(14) *Pwysy'n siarad?* 「話しているのは誰ですか？」(どなたですか?)

(15) *Llew sy'n siarad.* 「話しているのはセウです」(セウです)

(14)(15) は主語を強調する表現 ([1]参照:sy'n = sydd yn)

### その他の基本挨拶・基本表現

(16) *Sut rydych chi?* 「あなたは如何ですか？」(お元気ですか?)

(17) *Sut mae?* 「(調子は) どうですか？」

(18)(19)は副詞的表現 (*sut* は副詞的表現) を強調する表現

([9]参照)

## 5. 学習書における倒置構文を含む日常表現の紹介

以上見たように、強調構文は日常会話で頻繁に用いる表現である。学習書の中でこれらの表現がどのように紹介されているかを調べると、学習書全体の構成、特に1. で見たように、それが文構造を基準に書かれているか、使用場面を基準として書かれているかによって異なる。学習書は古いものほど文構造が基準となっており、最新のものほど使用場面に準拠する傾向がある。文構造に準拠したものでは、BOD構文の基本的構造を一通り導入してから倒置構文を「基本形」の「異形」として紹介するので、当然倒置構文の導入するのは後の課となる。例えば *Teach Yourself Welsh* (1960) では第28課 'Emphasis'が強調構文(「倒置構文」に同じ)という一つの課を構成し *Beth yw eich enw?* 「あなたの名前は何ですか？」のような倒置文を紹介している。*Catchphrase* (1980)では第9課の中に “The emphatic forms of *Rydw i, Roeddwn i*” というセクションを設け、倒置構文を紹介している。これら「古い」学習書に共通に見られるのは、倒置の際に起こる様々な規則をある程度体系的に紹介している点である。

それに対し、*Cwrs Mynediad* (2006)のような最新の学習書は使用場面に準拠した構成になっている。相手の名前を尋ねる表現 (*Pwy dych chi?* 「あなたの名前は?」) 等はカムリ語会話を学ぼうとする学習者にとっては必須の表現なので、第2課で早速導入している。但し、この構文が倒置構文であるといった事には全く言及していない。

これら「古い」学習書と「最新の」学習書の間立つ学習書として注目に値するのが、*Welsh* (1991)である。この学習書では最初の課でBOD構文の基本構造 (*Rydw i'n dysgu Cymraeg* 「私はカムリ語を学んでいます」) と倒置構文 (*Beth yw'ch enw chi?* 「あなたのお名前は何か?」) が同時に紹介されている。しかも第1課の文法解説の中で二つの文が全く異なる文構造であることを簡潔にポイントを押さえて説明している。この学習書の著者が、1960年の *Teach Yourself*

*Welsh* の著者であることも注目に値する。ここ 30 年間で学習書のスタイルが文構造中心のものから使用場面中心のものに移行しつつあるものの、1991 年の著者は、使用場面中心の課の中に、1960 年の学習書で言及した倒置構文の規則について言及することも忘れていないという点が興味深い。

## 6. 結論

現代カムリ語学習書の目的は、会話ができるようになることに重点が置かれているものが多い。但し、4. に見たように日常的表現の中に倒置構文が存在し、それらの中の BOD 動詞がある場合に *yw* であったり *mae* であったりし、大人の学習者は学習の過程でどのような規則が働いているのか関心を持つこともあるであろう。その際に、1991 年の *Welsh* の場合のように、適度な文法解説を添えながら倒置構文を含む日常表現を導入する方法が望ましいのではないかと考える。

### 参考文献

- Meek, Elin (2005) *Cwrs Mynediad (Fersiwn y De/South Wales Version)*. Cardiff: Cyd-Bwyllgor Addysg Cymru/Welsh Joint Education Committee
- Jones, T. J. Rhys. (1991) *Welsh: A Complete Course for Beginners*. Sevenoaks: Hodder & Stoughton.
- Smith, A. S. D. (Caradar) (1935) *Welsh Made Easy: Second Part*. Cardiff: Hughes and Sons
- Davies, Basil & Davies, Cennard (1980) *Catchphrase: cwrs dysgu Cymraeg llafar/a course in spoken Welsh. rhan un/part one*. Penygroes: Sain
- 水谷宏 (1996) 『毎日ウェールズ語を話そう』東京：大学書林
- Bowen, John T. & Jones, T. J. Rhys (1960) *Teach Yourself Welsh*. London: The English Universities Press.